

メッセージアウトライン

ヤコブの手紙 1:26~27 「真の宗教」

[26]「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです」

キリスト教の教えを熱心に行うことは立派なことである。しかし、そのことに熱心なあまり教えられているみことばの範囲を超えて脱線してしまうことがある。→「熱心だけで知識のない者はよくない。急ぎ足の者はつまづく」箴言 19:2

26 節では、「自分の舌にくつわをかけない」「自分の心を欺いている」の二点があげられている。

「くつわ」とは口を自由に開けないようにする道具のことであり、本来は馬や牛などの家畜を働かせる時に装着するものである。それで自分の舌にくつわをかけないということは舌をコントロールせず自由にさせるという意味となる。口は災いのもとと言われるが世界中で起こる多くの事件のうち、口から出たことばによって巻き起こされたものは非常に多いであろう。クリスチャンであっても自分の舌を制御しないならば同じような問題が起きないとも限らない。

同じ舌から賛美と呪いが出てくる。→ヤコブ 3:1~10

私たちは他人の噂話や、非難中傷などを厳に慎まなければならない。→コロサイ 3:13

「宗教」ということばは神を礼拝する宗教的形式や祭儀のことを指す。それで人が几帳面に宗教的形式のすべてを守り、聖書に書かれている戒めを守って、それゆえ自分は宗教に熱心であると思っても、毎日の生活の中で自分の舌を制御せず自分のことばに不注意であるならば、それは自分の心を欺いていることになる。しかし逆に、すべてにおいて沈黙し、何も発言しない

ということも問題である。ここで教えられていることは語るべきことは語り、人を中傷することや人の徳を落とすこと、神の栄光を傷つけ、教会の一致を損なうようなことは語らない。つまり舌を制御することの重要性なのである。→コロサイ 4:6

[27]「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです」

26 節では自分がいかに宗教に熱心であると思っても、舌を制御しなければ、それはむなしいということを経験したが、27 節ではさらに進んで真の宗教とはどのようなものであるかを教えていく。それはまず第一に「孤児ややもめたちが困っているときに世話をする」ことである。

なぜここでは特に「孤児とやもめ」が取り上げられているのか。それは神が特に彼らに対して目を留めておられるからである。→詩篇 68:5, 146:9, マルコ 12:40 神は特に身寄りのない孤児ややもめに目を留められ、恵みとあわれみをもって支えておられるのである。そして神はクリスチャン、教会を通してのみこころを成し遂げようとなさっているのである。自らをきよくけがれのない宗教を信じるという者はこのことを実践しなければならない。やもめのことについて

は→ I テモテ 5:3~16 しかし孤児ややもめだけ世話をすればよいということではない。マタイ 25:31~46 で主イエスは病気の者を見舞い、裸の者に着る物を与える者は主に従う人であると教えている。それゆえ教会は特に困っている孤児ややもめたちの世話をすべきであるが、また他方ではあらゆる機会に、困っている人、苦しんでいる人々に助けの手を伸べる良い働きをする必要もあることも知っておかなければならない。

真の宗教の本質の第二は「この世から自分をきよく守る」ことにある。→ I テサロニケ 4:3~8

私たち信仰者はこの世の流れに流されていくのではなく、しっかりとイエス・キリストという固い土台の上に踏みとどまって戦い、きよさを求めていかなければならない。→ヘブル 12:14

「きよい」ということばのもともとの意味は、「別のものとされる、分かたれる」ということ。

すなわち、「この世にあってこの世のものではない。この世とは分かたれ、別のものとされる」これがイエス・キリストを救い主と信じ、きよめられたクリスチャン本来の姿である。それゆえ、私たちはこの世の流れに流されていくのではなく、しっかりと信仰に立って信仰の戦いを戦い、きよさを追い求め、全うしていくことが大切である。

私たちは以上のことをよく覚えて、教えられていることを実践し、信仰の歩みを進めていかなければならない。